令和７年度　第２回　幼児教育学科　専任非常勤教員合同会議　　令和８年３月25日

日時：令和８年３月５日（木）13時30分～15時30分
会場：短期大学部棟　A108教室
参加者：（本学）太田、石野、上野、喜多、坂井亜也子、百海、中村、米川
三浦（進行）、村上（討議進行）、柴田（記録）
（非常勤）岡部、改田、川岸、斎藤、坂井美香、鋪村、田中、森田、山崎、山田
テーマ：学生の意欲を高める成績評価について
「各授業科目における到達目標についての達成状況に対して成績評価が適正であるか。GPAの分布や授業アンケート結果から学習成果の達成状況を評価し査定（アセスメント）する」

【内容】

１．学長挨拶

かつては定員を超過する学生を擁する本学科であったが、次年度新入生が最後の幼児教育学科学生となる。今後は保育者養成の資源を大学と統合再編する形で一元化し、金城学園における保育者養成のあり方を探っていきたいと考えている。先生方には長らくのご支援に大変感謝している。

２．各部報告

・教務部から（村上）

各科目の成績分布表を配布した（回収資料）。本会の話題提供でも「学生の意欲を高める成績評価」というテーマで行い、それを踏まえてグループ討議も行なった。

３．話題提供

・①百海・石野

「幼児と健康（演習科目）」を例にする。評価については基本的に「何ができるようになったか」ということを考えている。そのため学習途中のフィードバックをまめに行うことを大切にしている。また「内発的動機づけを高める」ために、学生の返答に対しても良いコメントを返すようにしている。

シラバスに記載したルーブリックについては、最初の授業で学生に提示している。授業内の指導案作成や振り返りについても、ワークを通して視覚化や言語化を学生に促し、さらに学生が反省点や疑問を持つことも記載欄を作る取り組み自体を評価につなげている。Google classroomを活用することで学生の意見を全体共有することもでき、学生が互いに多様な意見に触れることにもつながる。

実際の成績評価に関しては、Excelを活用して一覧表を作成している。シラバスやルーブリックに対応した形での成績評価を行っており、それを可視化できる形とすることによって、学生から成績開示の要求があった時のフィードバックやその根拠の明示にもなる。

②森田ゆかり

美術やその授業に関して不安を抱いている学生は全体の60%ほど。そのため成績の付け方も学生に明示している。また毎回の授業でも目標や内容を伝えるようにしている。ワークとして文章を書く課題を出す際にも、文章量の目安を示し、自分なりの考えを述べることが大切であることなども伝える。それらはルーブリックとして提示し、学生とも共有できるようになっている。授業中では、学生の取り組みに対して教員もメモとして評価を残すようにし、気になる学生がいたらその後の授業でも気に掛けるようにしている。毎回の授業での評価の集計を基に

して科目を通した成績を出す。一見面倒なようだが、この方法にしてから学生の成績がつけやすくなった。

中学での授業を通してわかったことがある。生徒に一律の課題を与えるよりも自由進度を重視するようになった。また１人１台タブレットの時代となり、正解をネットに求めることが多くなったのではと感じる。さらに、ディスプレイ上の整った文字を見る機会が増えることにより、反対に乱れた手書き文字を読めない生徒が増えた。授業の手順を示したり、課題提示をすることの難しさを感じ、これまで以上に丁寧に対応をしなければならない。短大の学生に対しても、その成績評価の付け方という以前の問題として、授業の進め方や提示の仕方についても気にかける必要があると考えている。

４．グループ討議

学生の GPA 分布の適正化を図るためにも、各科目の成績評価の方法が具体的であり、評価分布についても適正なものとしていく必要がある。グループごとに成績評価について意見交換を行なった。

５．各グループからの報告（意見要約）

〈授業中の評価について〉

- 日々のかかわりの中で、「ほめる」ことのインフレが生じている（響きにくい）
- 学生同士の評価（伝え合い）や学生の自己評価を大切にしている
- 仕事では整理整頓が大切ということで、授業での資料ファイリングも評価に取り入れている
- 「しんどい」「困った」からの達成感を感じてもらうための声かけなどが必要
- 頑張る意味や成果について、学生のメリットとして感じられるよう明確に伝えている
- 器楽では結果としての実技の比重が高いが、普段の取り組み姿勢も評価を加える予定
- 課題ごとのフィードバックの仕方は教員それぞれだが、学生の意欲を高めるためには必要
- フィードバックの際にあからさまな点数を伝えることは、反対に意欲を削ぐため控えている
- 課題では「正解」よりも「自分の考え」、授業中の発言や発表も「自ら」することに加点する

〈学期末の成績について〉

- 成績が良いことが学生にとってどんなメリットがあるのか、意欲と成績をつなげることが難しい
- AI による成績評価をする時代が来たらしいが、教員の評価とは異なるかもしれない
- 自己評価を重視したい
- 器楽授業に関しては、教員共通の成績評価が難しい。

６．閉会挨拶（学科長）

【所感】

今回は、学生の意欲を高める「成績評価」をテーマとした。まずは学生の GPA 分布適正化の前提となる各科目成績分布について確認し、現在生じている科目ごとの成績評価の偏りに気付き、今後それが小さくなるように教員間での共有が図れたと考える。その上で成績評価に関する教務的なルールについても確認しつつ、話題提供においては適切な評価の付け方やその評価のかかわり自体を学生の学ぶ意欲につなげる工夫の実践例を共有した。話題提供で共通していたことは、成績をつける際には評価のポイントや基準を自分の中で明確にしておくことの重要性であり、それが学生への指導にも繋がるということであった。また、グループ討議や発表を通して各教員が自らの授業を振り返る機会ともなり、来年度の授業実践における選択肢は広がったものと考える。このような取り組みが実際の授業アンケートや成績分布等のデータに成果として反映されるのか、今後も検証を続けていくことが重要であろう。